

咳喘息治療における吸入ステロイド単剤と長時間作用性 β_2 刺激薬／吸入ステロイド配合剤の比較検討

宮沢直幹¹⁾, 佐藤 隆¹⁾, 小林信明¹⁾, 三科 圭¹⁾, 井上 聡¹⁾, 佐々木昌博¹⁾,
金子 猛²⁾, 石ヶ坪良明³⁾

横浜市立大学附属病院呼吸器内科¹⁾

横浜市立大学附属市民総合医療センター呼吸器病センター²⁾

横浜市立大学大学院医学研究科病態免疫制御内科学³⁾

【背景】咳喘息は咳嗽のみを症状とする気管支喘息の亜型と考えられている。その約30%は数年以内に典型的気管支喘息に移行するが、早期に吸入ステロイド薬 (ICS) を用いることによりこの進行が予防されるため、ICSが第一選択薬とされている。 β_2 刺激薬などの気管支拡張薬も有効であるが、その使用適応には不明な点が多い。

【目的】咳喘息における気管支拡張薬併用の有用性について検討するために、ICS単剤と長時間作用性 β_2 刺激薬／ICS配合剤の治療効果を比較した。

【方法】咳喘息と診断した24名を無作為にプロピオン酸フルチカゾン (FP) 200 μ g bid、サルメテロール／フルチカゾン配合剤 (SFC) 50/100 μ g bid、SFC 50/250 μ g bidの3群に分けて8週間経過観察した。自覚症状の評価には咳点数 (NRS; 0 - 4) を用いた。

【結果】FP200群では治療前に比し5週間目で有意に咳点数は改善した。一方、SFC 50/100群では4週目に、SFC 50/250群では2週目に有意に改善していた。4週目の時点で比較するとSFC 50/250群の咳点数改善度は -1.8 ± 0.8 で、FP 200群の -0.8 ± 0.7 よりも有意に改善度が大きかった ($p < 0.05$)。

【結語】気管支拡張薬／ICS配合剤はICS単剤に比し、早期に咳症状を改善させた。咳喘息の早期改善には、十分量のICSと気管支拡張薬の併用が有用であると考えられた。